

緩和ケア病棟における事例検討会に参加した看護チームの成長過程

西川綾（基礎看護学）

【キーワード】 緩和ケア病棟・事例検討会・看護チーム・看護観・成長過程

本研究の目的は、緩和ケア病棟において事例検討会（以下「検討会」とする）に参加した看護チームの成長過程を明らかにし、看護の質を上げるための検討会を積み重ねていく上での示唆を得ることである。

研究対象は、研究者が所属する緩和ケア病棟に勤務している看護師21名のうち研究への参加に同意を得られた14名である。研究方法は、実践上の気になる事例について、問題意識をもった看護師の提出動機を解決を目指し検討会を実施した。その内容の逐語録と感想カードをもとに、検討会がどのように進んだのか、看護師の発言内容の転換点に着目し、局面として区切り研究素材とした。局面ごとの検討内容の特徴から、検討会の特徴と看護チームの認識の特徴を抽出した。その結果、検討会に参加した看護チームの成長過程の特徴として、以下のことが明らかとなった。

検討会に参加した看護チームは、《対象の見つめ方》《実践の評価》《自己の看護者としての目標像の明確化》が、深まっていた。

対象の見つめ方の変化・発展において、部分的、断片的な事実注目していた段階から、患者・家族が積極的治療から緩和ケアへの移行を決断した過程をたどり、患者・家族が置かれた状況や言動から、それぞれの思いを推察した。さらに、家族が患者とともにこれまでの経過を、どのようにたどってきたのかを事実をもとに追体験することで、患者・家族の関係性や個々の思いを、それぞれの位置から感じ取るという対象像の深まりがあった。

実践の評価において、看護師の位置で関わりを振り返っていた段階から、対象像が深まると、自己が

描いていた対象像とのズレに気づき、対象の位置で、対象への関わりを看護過程として評価する段階へと変化した。

対象像が描け、対象の位置から実践の評価が行えるようになると、緩和ケア病棟の看護師としての人間観や死生観が深まり、自己のありたい姿や看護師としての目標像が明確になっていた。

さらに、対象への看護の必要性が浮き彫りになると、自ら行動し、実践を通して、対象の思いを感じ取り、家族とともに患者を支えぬくという看護実践能力が高まっていた。

以上より、看護の質を上げるための検討会を積み重ねていく上での大事な要素として、以下の2点を抽出した。

- 1) 問題ととらえている現象に対して、自己の困難感や不安感などの感情や看護師として望む患者・家族のあり方が先行していないか自問自答し、自己の感情から抜け出し、対象に関心を注ぐ。そして、対象の位置から対象の思いや行動の意味を推察する。
- 2) 自己の実践を評価する際、ケアできなかった後悔の思いや不全感が先行しがちであるが、関わりが患者・家族にとってどのような意味があったのかを、患者・家族の変化を事実でとらえ、看護師の感情も含めた判断過程と関わりを振り返り、対象の位置から評価する。